緋弾のアリア ～教授に教わりし者～

百座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア　～教授に教わりし者～

【Ｎコード】
Ｎ２２８１Ｚ

【作者名】
百座

【あらすじ】
１年の時　とある事情でロンドン武偵高にクエストに行っていた俺、日野悠治（ひのゆうじ）は２年の始業式の時に東京武偵高に帰ってきた。
俺はその日神崎・Ｈ・アリアと出会う。
その日から俺が追い続けている事件は進展する。神崎・Ｈ・アリアと緋緋色金によって・・・
そして俺は教授（ししょう）からあるクエストを言い渡される
「守ってもらえるかな？　神埼・Ｈ・アリアを・・・」

第1話　1年ぶりの武偵高

「おい、ボウズついたぞ武偵高だ」
「ふあぁ・・・」
船の甲板そこに備え付けられたベンチから俺、日野悠治(ひのゆうじ)は体を起こす。
うん、いい天気だ雲ひとつない。
「もうついたの早いねおじさん」
「もうってお前2日ぐらい寝てたぞ！」
「そうだっけ？」
俺は背伸びをしながら船の先端の方まで歩いていく。　そこから見えるのは人口浮島。
かれこれ1年ぶりか・・・みんな元気かな？

「おじさん、ありがとね～」
俺は久しぶりに会うみんなに少しどきどきしながら船を下りた。

船から下りて歩くこと数分
目の前には大きな建造物がみえてきた。　武偵高だ。
東京武偵高校、ここは近代凶悪化する犯罪に対抗するために新しく作られた國際資格、『武偵』を育成するための教育機関である。
『武偵』とは簡単に言うと武装を許された探偵で警察にした活動ができるもののことを言う。　警察と違い『武偵』は金で動く、金さえ払えば武偵方の許す限りならなんでもこなす便利屋と考えてもらってもよい。

校舎に入った俺は教務科(マスターズ)に書類を持って行き自分の教室に向かう。
俺はどうやら2－Aらしい。
教室の扉の前に立った俺は深呼吸をする。　やっぱ1年もあってな

いと緊張するなぁ。
ガラガラ、と扉を開け中に入る。
丁度ホームルームの途中だったようで先生が『ロンドン武偵高にクエストに行ってた悠治くんが帰ってきましたよー』と軽くみんなに報告する。
「おーぅ！　悠治！　お前は絶対帰ってくると思ってたぞ！　さぁ、ここで一秒でも早く死んでくれ！」
「悠治ぃ！　やっと死にに帰ってきやがったか！　お前みたいな間抜けはすぐ死ねるぞ！」
と声をかけてきたのはアサルトの夏海と村上だ。
「お前らこそここでコンマ一秒でもはやく爆死しろ！」
俺が二人に向けて言い返す。
これは別に怒って言っているわけではない。

『アサルト』――通称　明日無き学科
この学科の卒業時の生存率は９７，１％とされている。　つまり１００人生徒がいたとしてそのうち３人は無事卒業できないのである。
　クエスト中に命を落としたり、訓練中に命を落としたりと理由はさまざまだが危険な学科である。　もちろん毎年そういうわけではない、全員卒業できた年だってあるらしいしな。　そんな危険な学科アサルトでは『死ね』と言うのはおはよう、こんにちわと同じ挨拶なのだ。
俺もこんな危険でぶっ飛んだ学科に属しているわけだが・・・

「それじゃあ、悠治くんの席は・・・」
「センセー俺の隣空いてますよ」
とぶんぶん手を振っている１９０はあるであろうこの大男は武藤剛気。
こいつは車輌（ロジ）科の優等生でよく俺を事件の現場に運んでくれた。
乗り物と名のつくものならバイクからロケットまで何でも操縦でき

るいわば乗り物オタクだ。
俺は武藤の隣にささっと座る。

しばらくぼーっとしていると不意に後ろの扉が開いた。
「すみません、ちょっと事情があって遅れました」
そこから入ってきたのは遠山キンジ、俺がこっちにいたころよくパーティー組んでたやつだ。
俺がよう、キンジと声をかける前に
「あたしあいつの隣がいい」
丁度キンジが入ってくる少し前、３学期の終わりに転校してきた神崎・Ｈ・アリアの紹介があった。
その終わり際に入ってきたキンジにアリアは告げた。
アリア・・・どこかで聞いたような聞かないような・・・まぁいいか。
そんなことよりアリアの『あいつの隣がいい』でクラスは大盛り上がりだ。
「な、なんでだよ」
キンジが頭を抱える。
ここはそっと見守っとくとするか。
「よ、よかったなキンジ、なんか知らんがお前にも春が来たみただぞ。　センセー俺転校生さんに席譲りまーす！」
武藤がささっと席を移動するとそこに来たアリアはキンジの方を向き
「キンジこれさっきのベルト」
とベルトを投げ渡した。　キンジ、ベルトを貸すなんてお前一体何したんだ？　半ばおびえているように見えるキンジに俺の疑問は膨らむ。
そこにその推理をしてくれるものが現れた。

「理子分かった！　分かっちゃった！　これフラグばっきばきにたってるよ！」
キンジの左に座っていた峰理子が　がたん、と勢いよく席を立つ。
「キー君ベルトしてない！　そしてそのベルトをツインテールさんが持ってきた！　これ謎でしょ？　謎でしょ？　でも理子には推理できた！　できちゃった！」
大体アリアと同じぐらいの小柄なこの子は探偵科（インケスタ）一のおばかさんだ。
制服もゴスロリ風に魔改造してある。
「キー君は彼女の前でベルトを取るなんらかの行為をした！　そして、彼女の部屋にベルトを忘れてきた。　つまり二人は熱い熱い恋愛の真っ最中なんだよ！」
理子は髪をぴょンぴょンさせながらおばか推理をぶちまける。
普通の人が聞いてもそこまで信用はしないだろう。　しかしここは馬鹿の吹き溜まり武偵高。
クラスは大盛り上がりに盛り上がる。
「き、キンジがこんな可愛い子といつ間に」「影の薄い奴だと思ってたのに」「フケツ」
などなどさまざまな言葉が飛び交い、だんだんヒートアップしていく中

ダダダン・・・
アリアが銃をぶっ放したのだ。　アリアの持つ漆黒のガバメントから打ち出された４５ＡＣＰ弾が壁に大きな穴を開ける。　クラスはしーんと静まり返り、理子はペタンと座り込んでしまった。
なぜ教室で発砲しても誰も止めないのか。　それはここ武偵高では射撃場以外での発砲は『必要以上にしないこと』となっている。
つまりやってもいい。　俺達は日常茶飯事のように銃撃戦が行われる武偵になろうというものだから、どこぞの軍隊並に感覚を麻痺させる必要がある。
だが・・・おそらく自己紹介で発砲したのはこいつが初めてだろう。

「れ、恋愛なんてくだらない！」
少し俯き顔を赤くしたアリアは言い放つ。　カランカラン、拳銃から排出された空薬莢が床に落ちて静けさが増す。
「全員覚えておきなさい！　そんな馬鹿なこと言う奴には・・・」
後に何百回何千回と聴かされることになるであろうその言葉をアリアは言い放つ。
「風穴開けるわよ！」

第2話　奴隷宣告（前書き）

更新かなり遅くなりましたすいません

第2話　奴隷宣告

ピンポーン・・・
俺は今キンジの家に来ている。
なぜアサルトである俺がキンジの家に来てるかって？
そりゃぁあいつら（アサルトのやつら）が悪い。

――時はさかのぼり1時間ほど前
ゲーセンに寄ってたので帰るのが少しばかり遅くなった俺は自分の家に帰ったんだ。
アサルトに所属している俺は当然の如くアサルトの寮に住むことになる。　引越しの荷物が入っている旅行かばんを片手に俺は自分の家の扉を開けた。
俺は一瞬なにがなんだか分からなかった。
扉を開けたとたん俺の真横を銃弾が飛んできたのだ。　それも5発も

「さぁ、そのリモコンを渡せ！　今すぐだ！」
「誰が渡すか！　俺は毎週この『世界一危険な授業』を見るって決めてんだ。　譲れるか！」
さらにダダダダダン、ダダダン・・・・
銃声が響きわたる。　テレビの取り合いか？
中に入って行くと家具は壊れ、壁には大きな穴が開いてありさらには家の中のいたるところに弾痕が・・
そして何もない部屋。　おそらくは俺の部屋になるであろうそこは壁一面が大きな窓になってやがる。
この武偵の寮は家自体にも防弾の加工が施されており、ちょっとやそっとのことじゃ壁に穴など開かない
それこそ手榴弾を何発も投げ込んでやっと壁に穴が開くぐらいである。

何なんだこいつら・・・テレビのチャンネルの奪い合いでここまでするか！？
ここには住めん！　そう判断した俺は即座にその部屋から脱出し今に至るのである。

ガチャ・・・
キンジの家の扉が開き、キンジがでてくる
「だれだよ・・・って悠！？」
「よう、キンジ。　久しぶり」
「お前確かクエストでロンドンの方に行ってたんじゃなかったか？」
「何だやっぱり気づいてなかったのか。　俺お前と同じクラスなんだぜ？　ちなみにキンジが来たときにはすでに教室にいたぞ」
「全然気がつかなかった・・・。　ところで何の用だ？」
おっと、肝心なことを言うのを忘れてたな。
「ちょっと訳ありで住む場所が無いんだ。　しばらく泊めてくれよ」
「ああ、別にいいぞ。　部屋は開いてるとこ好きに使ってくれ」
サンキュー、俺はキンジにお礼を言いつつ中に入る。
とりあえず空き部屋にかばんを置きリビングに向かう。
本来４人部屋であるこの部屋は現在キンジ一人しか住んでいない。
それというのもキンジは３学期の途中という中途半端な時期にアサルトから転科したため相部屋の部屋が開いてなかったのだ。　それでここで一人暮らし。　いいよなぁ、こんないいところ一人で使えて。
「それにしても何があったんだ？　住めなくなるって」
リビングに入るとソファーに腰掛けたキンジが俺に聞いてきた。
「いやぁなぜか家に着いたら俺の部屋・・・っていうか家が破壊されててなとても人が住める状態じゃないんだ・・・」

「あいつらのことだどうせテレビのチャンネルでも奪い合ってたんだろ？」
「なぜ分かる！？」
「あいつら馬鹿だからな」
呆れたように言うキンジ。　確かにそうだ俺もそう思う。

ピンポーン・・・

突然なるチャイム
「それにしても帰ってくるなり災難だな悠治」
それが聞こえてないかのように自然に話しかけてくるキンジ
居留守を使う気だな？

ピンポンピンポーン

「それならキンジも朝は災難だったんじゃないか？」
キンジが驚いて俺を見ている。　なぜそのことを？って顔だな。
「なぜそのことを？」
ぶっ！！　思わず吹いちまった。　あまりにも顔とセリフが一致してたからな。
「だってお前朝遅れてきてただろ？　それに自転車爆破のことの一斉メールもでてたしな。　後は勘だよ勘」

ピポピポピポピピピピピピンポーン・・・ピポピポピポーン。

「勘っておま・・・あぁ、うっせえな！　誰だよ」
ついに諦めたかキンジが玄関に向かって歩き出す。　やっぱり居留守を使いたかったんだな。
面白そうだったので俺も後からついて行く。
そして、扉が開くと

「遅い！　あたしがチャイム押したら5秒以内に出ること！」
両手を腰に当て、赤紫色の瞳をギギンと吊り上げていたのは
「か、神崎！？」
制服姿のちびっ子でピンクのツインテールに赤紫色の瞳を持つ小学生か？とも思える体格をした
神崎・H・アリアだった
「アリアでいいわよ。　キンジ後それ運んどいて」
キンジに後ろに置いてあったかばんを持ってくるように指示しキンジを押しのけてずかずかと部屋に入ってくるものだから俺と目が合った。
「あんた誰？」
「お前と同じクラスの日野悠治だ」
「日野悠治どこかで聞いたような・・・あっ！　あんたまさか『武神』！？」
っ！？何でこいつがそのことを知ってやがる・・・
「さぁて？　なんのことやら？」
「とぼけても無駄よ、あんたロンドンで有名だった『武神』でしょ。
あたしの目はごまかせないわ！」
「いや違う、断じて違う！　それはお前の勘違いだ！」
「まぁいいわ」
何がいいんだよ。
アリアはリビングの窓のそばまで歩いていき夕日を背に浴びながらこちらを振り返り俺達を指差す。
そして言い放った。
「キンジ、悠。　あんた達あたしの奴隷になりなさい！」

第3話　奴隷のその意味

「ほら！　さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ！　無礼な奴ね！」
たった今俺達に奴隷宣告をしたアリアはポフ、とさっきキンジが座っていたソファーに座ってしまう。
まったく無礼者はどっちだ。

「コーヒー！　エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！　砂糖はカンナ！　一分以内！」
なんだそのコーヒーはエスプレッソまでしか分からん。
すぐには帰ってもらえないと思ったのかキンジは仕方ないという感じでコーヒーを出すと、アリアは不思議そうにコーヒーのにおいをかいだりしながら
「これほんとにコーヒー？」
「それしかないんだからありがたく飲めよ」
「変な味、ギリシャコーヒーに似てるけど・・・ちょっと違う」
だめだそれすら分からん。

それにしても人は見かけによらないって言ったもんだな。
こんな小学生みたいな女の子がコーヒー好きとは。　などと俺が考えていると突如アリアにらまれた。
「あんた今あたしのこと小学生みたいとか思ってたでしょ！」
チャキっと取り出した二丁拳銃を俺に向けるものだから慌てて否定する。
「ち、違うぞ！　そんなことは考えてない安心しろ」
「そう、ならいいわ」
アリアは二丁拳銃をしまってくれた。
すごい勘のよさだな。　俺が考えてたことまで分かるなんて
俺は少しひやひやしながらキンジが出してくれたコーヒーをすすっ

た。

「今朝助けてくれたことには感謝してる。　それにその・・・お前を怒らせるようなことを言ってしまったのは謝る。　でもなんでだからってここに押しかけてくる？」
アリアは目だけをキンジに向け
「分からないの？」
「分かるかよ！」
少しいらだったように言うキンジ
何のことだ？　さっぱり分からん。　一人話しについていけてない俺は少し様子を見ることにした。
「悠も分からない？」
今度は俺に目を向け尋ねてきた。
「何のこと話してるんだ？　さっぱり分からん」
「あんた達ならすぐ分かると思ったのに。　んー、そのうち思い当たるでしょ。　まぁいいわ」
よくねえ！　俺とキンジは心の中で叫んだ。
大体キンジは話に少しは話についていけてるみたいだが、俺はさっぱり分からん。
こりゃあ後でキンジに詳しいこと聞かないとな・・・

「おなか減った」
ソファーの手すりにもたれかかりながら盛大に話題を変えるアリア。
お、その仕草かわいいな。
横を見るとキンジは少し赤くなって顔を背けていた。
ああ、そっか　キンジってこういうの駄目だったっけ。
「なんか食べ物ないの？」
「ねーよ」
「相変わらずお前の家には食い物がねえのか」

「ほっとけ」
少しむくれるキンジ
「まぁそうむくれるな。　コンビニ行こーぜ」
俺はポケットに財布をねじ込みながらキンジに言う。
「こんびに？　ああ、あの小さなスーパーのことね。　じゃぁ行きましょ」
「じゃぁってなんだよじゃぁって」
「馬鹿ね食べ物を買いに行くのよ。　もう、夕食の時間でしょ」

コンビにから帰ってきた俺達は三人でテーブルに座って夕食をとる。
アリアとキンジが並び俺がキンジの正面という配置だ。
俺とキンジはハンバーグ弁当、
そしてアリアはももまんという謎のまんじゅうを口いっぱいに頬張り食べている。　しかもそれで５つ目だ。　コンビニの肉まんなどが蒸されている蒸し器の中に入っていたももまんをアリアは全て買った。
それ晩飯に全部食うのか？　と思っていたがそうらしい。　一体そ

の小さな体のどこにももまんが5つも入るんだか。　などと考えてる間にアリアは6つ目のももまんに手をだした。

「・・・って言うか奴隷ってなんだよ。　どういう意味だ？」
俺がさっきから聞こうと思っていたことをキンジは聞く。
「アサルトであたしのパーティに入りなさい。　そこで一緒に武偵活動するの」
「何言ってんだ、俺はアサルトが嫌で武偵高で一番まともなインケスタに転科したんだぞ。　それにこの学校からも、一般の高校に転校しようと思ってる。　武偵自体やめるつもりなんだよ。　それによりによってあんなとち狂ったとこに戻るなんて無理だ」
っておいおいキンジ、俺もアサルトなんだが・・・
まぁとち狂ってるってことは否定はしないがな。

「あたしには嫌いな言葉が3つあるわ」
「聞けよ人の話を」
「『無理』『疲れた』『面倒くさい』この3つは人間の持つ可能性を押しとどめるよくない言葉。　あたしの前では二度と使わないこと」
アリアはキンジの言葉を無視して続ける。
そして指についた餡を舐めながら
「二人はそうね・・・あたしと一緒にフロントがいいわ」
フロントというのは武偵がパーティを組んで布陣する際の前衛のことだ。
もちろん前衛なので負傷率は高く危険なポジションである。
俺がもっとも得意なポジションでもあるがな。
「よくない。　そもそもなんで俺なんだ？」
「太陽はなぜ昇る？　月はなぜ輝く？」
おいおい、この子は人の話を気がないのか？　話が飛んだ。
「キンジは質問ばっかりの子供みたい。　仮にも武偵なら情報を集

めて推理してみなさいよね」
「要するに俺達の力が必要な何かの事情があるんだろ？」
俺は今までの話を整理し、そう結論づけた。
コンビニでキンジから聞いた話によると、朝自転車に爆弾を仕掛けられたキンジをこの子が助けてそのとき何かしらのアクシデントがあったらしい。　そしてキンジがヒステリアモードになった。
ヒステリアモードとはキンジの体質でキンジが性的に興奮すると反射神経や脳が劇的に亢進される・・・
すなわちスーパーモードになれるのだ。
そのキンジがアリアと少し戦ったらしい。　そして彼女はとても強かったそうだ。
ヒステリアのキンジが手こずるレベルの戦闘能力をもっていて俺達にチームに加わってほしいを言うことはそれだけの何かがあるに違いない。　俺はそう踏んだのだ。
「まぁそういうことね。　ならその事情を推理してみなさい」
んー、そうきたか。　だが現状では情報に欠けるな・・・
「それはよく分からんが、１つ言っとくと俺はただのＡランクの武偵だぞ？　他にもっと強い奴がいるだろう」
「そう来るの悠？　あたし知ってるんだからあんたが『武神』だってこと」
「だから言っただろ、俺は『武神』じゃねえって」
「どうかしらね？」
こりゃあばれるのも時間の問題かな。
それにしてもこっちじゃ知ってる奴いないはずなんだけどなあ。

「とにかくだ！」
お、キンジが強気に出たな。
「帰ってくれ！　悠は仕方ないがお前は帰れ！」
「まぁ、そのうちね」

「そのうちっていつだよ」
「何が何でもパーティには入ってもらうわ！　あたしには時間がないの。　うんと言わないなら・・・」
「言わねーよ。　なら、どうするつもりだ？　やってみろ」
「言わないなら泊まっていくから」
ハハハ、キンジ顔がひきつってるぞ？

それにしてもこの子面白いな。　これなら俺はパーティに入ってやってもいいかもって思えてくる。
「ちょ、ちょっと待て！　何言ってんだ！　帰れうぇ」
きたねえ！　てんぱりすぎだキンジ。　ハンバーグ吐き出すなよ！
「うるさい！　泊まってくたら泊まってくから！　長期戦になることも想定済みよ」
ビシッと玄関のトランクを指指しながら言うアリア。
ああ、それお泊りセットだったんだな。
「なぁ、アリア俺は――――」
パーティに入ってもいいぞ、と言おうとしたのだが・・・
「――――でてけ！」
これはキンジではない、アリアだ。
だがここはキンジの部屋だぞ？
「な、なんで俺が出て行科無きゃならないんだよ。　ここはお前の部屋か！」
「分からず屋にはお仕置きよ！　外で頭冷やしてきなさい！　しばらく戻ってくるな！」
フー、とキンジを威嚇しながら言うアリアは猫にそっくりだ。
「何してんのよ悠」
「え？」
キンジが蹴りだしたアリアは俺を睨みつけてくる。
「さっさと出て行きなさい！　風穴開けるわよ！」
え？　俺もかよ！

こうして、キンジと俺は夜の街へと追い出されるのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2281z/

緋弾のアリア ～教授に教わりし者～

2011年12月18日23時54分発行